

書評

西岡力著『狂った隣国 金正恩・北朝鮮の真実』

潮 匡人（評論家・国家基本問題研究所客員研究員）

月刊『WiLL』誌上で2017年8月号から連載されている「月報 朝鮮半島」の「最近三年ほどの連載をベースに新情報を書き加えて一冊にまとめたもの」が本書である。

冒頭こう書き出す。

《北朝鮮、そして韓国で今、何が起きているのかが分かっていない——。／新聞・テレビの韓国・北朝鮮報道に接しながら私はずっと、そう感じている。その一番の理由は報じべきファクト（真実）が報じられていないケースがあまりに多いのだ。》（「はじめに——金正恩・北朝鮮の真実を直視せよ！」）

そこで「多くの日本人に真実を伝えたい」と考えた著者が連載を始めたのが、月刊『WiLL』誌上の「月報 朝鮮半島」である。

朝鮮有事は台湾有事と同時に起きる

本書の表紙カバーに巻かれた帯はこう謳う。

《ご乱心！ 奇行に走る“将軍サマ” 金正恩

- ・本妻& 3人の愛人+7人の子供一骨肉の争いが激化！
- ・体重140キロ!? 一呼吸も歩行も苦しい金正恩
- ・実は平壤はクーデター前夜！—金正恩時代の終焉か！
- ・朝鮮有事は台湾有事と同時に起きる！

驚きの事実が次々に！》

以上の帯ネームだけを読むと、学術書からは程遠いが、著者はれっきとした学者・研究者の西岡力教授（麗澤大学特任）。国際基督教大学卒業後、筑波大学大学院地域研究科修了（国際学修士）、韓国の延世大学国際学科にも留学した。

外務省の専門調査員として在韓日本大使館で勤務した経験も持つ。その後、東京基督教大学教授等を経て、現在はモラロジー研究所教授・歴史研究室長も兼ねる。

2015年には、第30回「正論大賞」を受賞した。本誌第11号で、久保田るり子編集委員（産経新聞）が書評した『韓国の大統領はなぜ逮捕されるのか 北朝鮮対南工作の深い闇』（草思社）など、多数の著書で知られる。

以下、目次に沿って、見ていこう。

まず、「ご乱心？ 奇行に走る金正恩“将軍サマ、——四人の女と七人の子供の骨肉の争い」と題した1章で、「激化する後継者争い」の行方や、「金正恩激ヤセの真相」に迫る。

続く「2章 続出する病死、餓死、凍死者——深刻度を増す食糧難」では、「熾烈を極める国内事情」や「住民の不満は限界へ」達しつつある現状を、また「3章 実は平壤はクーデター前夜——金正恩時代は終わった!?」でも、「ありとあらゆる犯罪行為と反社会的行為がまん延」する現状を描く。

自衛隊出身の評者には、「4章 朝鮮有事は台湾有事と同時に起きる——中国・ロシアと接近する北朝鮮」が目をつけた。

4章の冒頭、著者が入手した以下の「内部情報」を明かす。

《ロシア大統領プーチンは開戦前、金正恩と習近平に対して、「一週間以内にウクライナを占領する計画だ」と通報した。》

同情報によると、「中国は早ければ二〇二二年末か二〇二三年に台湾侵略を計画していた。その作戦にあたって、中国が北朝鮮に対して朝鮮半島で局地戦を起こし、米軍を攪乱してほしいと依頼していた」という。私事ながら、拙著最新刊『台湾有事の衝撃 そのとき、日本の「戦後」が終わる』（秀和システム）でも、「朝鮮有事は台湾有事と同時に起きる」可能性に敷衍した。

朝鮮戦争への参戦を認めたプーチン大統領

さらに本書は、2023年7月28日の「朝鮮中央通信」の“報道”をもとに、前27日の北朝鮮の朝鮮戦争「戦勝」七十周年記念閱兵式にあたり、訪朝したロシアのショイグ国防相が持参したプーチン大統領の祝賀演説の全文を紹介している。

なかでも注目すべきは、本書が傍線を付した以下のくだりである。

《数万回の戦闘飛行を遂行した飛行士を含むソ連の軍人も、朝鮮の愛国者と共に肩を組んで戦いながら、敵の撃滅に重みのある寄与をした。》

本来なら、改めて指摘するまでもないが、右は、国連安保理の常任理事国（旧ソ連・現ロシア）が、なんと「国連軍」を「敵」として、その「撃滅に重みのある寄与をした」と初めてみずから認めたわけである。以上が持つ意味はきわめて重い。

そうであるにもかかわらず、本書が解説したとおり、「ロシア政府が公式に（朝鮮戦争への）参戦を認めたのはこれが最初だ。ところが日本と韓国のマスコミはこの大ニュースを報じなかった」（丸括弧内は潮の補記・以下同）。

その一方、公共放送NHK以下マスコミが重用するのは、きまって平岩俊司教授（南山大学）や磯崎敦仁教授（慶応大学）ら。本書は両名の新聞コメントを引きながら「二人とも今回の発射が計画に基づく新ミサイル開発の一環だと評価しているが、それは間違いだ」と指弾している。

さらに、北朝鮮の核戦力についての分析を踏まえたうえで、4章をこう締めている。《まずなすべきは、日本と韓国に対する米国の核による拡大抑止を強化し、それを積極的に発信すること。米軍の戦術核ミサイルを日本国内に配備することを早急に検討すべきだ。その上で、第二撃に特化したわが国の独自核武装、原子力潜水艦に積んだ核搭載弾道ミサイルの保持について議論を広く行うべきではないか。》

とくに異論を覚えない。

続く「5章 北朝鮮に近づく韓国——文在寅前政権の負の遺産」が明かした「衝撃のスクープ」も見逃せない。

明かされた「衝撃のスクープ」

著者が本書「はじめに」で、「ぜひ読んでほしい」と書いた「二〇一八年十二月に起きた韓国海軍イージス艦による自衛隊機への火器管制レーダー照射事件に関するスクープ」で

ある。著者は続けてこう書く。

《問題の本質は日本の排他的経済水域まで入ってきた北朝鮮の小さな木造船を「救助」するために、なぜ(韓国) イージス艦が出動したのか、だ。その問いに答える鍵は、乗っていた四人の正体だ。》

自衛隊機への火器管制レーダー照射事件の直後に訪韓し、軍関係者らに取材した著者は「乗っていた四人が金正恩を警護する護衛司令部直属の東洋貿易総会社幹部だという有力情報を入手した」。

著者によると、事件の背景には、「米国情報機関が仕掛けた金正恩暗殺作戦があった」という。どういうことか。

《護衛司令部幹部が買収され、金正恩の位置情報を米国に教えており、それが発覚したため大粛清があり、身の危険を感じた四人が日本亡命を目指して木造船で逃亡、北朝鮮が文在寅政権に四人の送還を依頼し、韓国海軍イージス艦が出動したという驚くべき話だ。》

本書は、2023年6月8日付「産経新聞」に掲載された阿比留留比論説委員のコラムから、当時の河野克俊統合幕僚長の以下コメントも引用している。

「当時、そんな話が流れていて、私も噂としては聞いている。そういうことなんだろうなとは思いますが、韓国自身に説明してもらわないといけない前政権の闇だろう」

そのうえで、5章をこう締める。

《同事件の真相が解明され責任者が処罰されなければ、韓国政府と軍の中に、北朝鮮とつながる勢力が尹錫悦政権下でも存在していることになる。そのような状態で日韓の軍事協力を続けるには限界がある。そのことをきちんと認識しつつ、尹錫悦政権との関係改善を慎重に進めるしかない。》

そのとおりでないだろうか。

著者は、拙稿冒頭で紹介した学者・研究者としての業績に加え、「北朝鮮に拉致された日本人を救出するための全国協議会(救う会)」の「創設メンバーで現会長として二十六年間、救出運動に取り組んできた」(本書)。

この「救う会」と「家族会」は2023年2月、「親の世代の家族が存命のうちに全拉致被害者の一括帰国が実現するなら、我が国が北朝鮮に人道支援を行うことに反対しない」との運動方針をまとめた。

この運動方針が日朝関係を動かしつつある現状を詳述したのが、最終「6章 見えてきた、拉致問題解決の日——追い込まれる北朝鮮、最後の一手を打つか」である。

著者は本書で「岸田政権の下で全拉致被害者の即時一括帰国が実現する可能性が見えてきた。拉致被害者救出は最後の勝負の時を迎えている」と明記した。そのうえで、本書をこう締めた。「日本人を助ける。それは私たち日本人がやることではないか」。

まさにいま、私たち日本人が読むべき新刊である。

(WAC、2023年)